

121 健常日本人成人男子の甲状腺ホルモン値の
検討

東京都老人研第一臨床生理
○木谷健一
聖マリアンナ医大第三内科
佐々木康人
ヘキストジャパン R1 課
新発田杏子

目的：血清中の甲状腺ホルモン値の年齢との関係はトリヨードチロニン (T_3) のようによく知られるものもあるが、諸家の報告の一致しないものも少なくない。

人種、環境、性など年齢以外の因子の影響も考えられまた対象が、健常生活者か、入院中の患者かによっても影響される。或る程度これらの因子を固定させ、年齢による変化についての検討を行なった。

方法：都内某社の勤務者男子及び医大学生 volunteer より得た血清を対象とした。20才より50才迄各 age group 約20名とし、血清チロキシン結合能 (TBC) チロキシン結合グロブリン (TBG) トリヨードチロニン (T_3)、チロキシン (T_4) リバース (rT_3) を測定した。TBCはウルトラグノスト[®] T_3 、TBG、 T_3 、 T_4 はリアグノスト[®]-TBG、 $-T_3$ 、 $-T_4$ (PEG法) rT_3 はPEG法 Reverse T_3 kitによった。

結果：年齢40才台に1名TBG $0\mu\text{g}/\text{m}\ell$ を示しこの例は除外した。TBCは全平均 9.91 ± 4.7 (SD) % であり、40才台が他群に比しやや低下した。また T_4 も同様40才台でやや低値を示したが年齢による有意差はみられなかった。全例平均 $9.47 \pm 1.616 \text{ ng}/\text{m}\ell$ であった。 T_3 は加齢と共に徐々に低下し、20才台と50才台では、有意差をみとめた ($P < 0.05$) また年齢との間に負の相関を認めた。全例平均は $1.0 \pm 0.2 \text{ ng}/\text{m}\ell$ であった。

rT_3 も加齢による変化はなく、全例平均で $0.33 \pm 0.07 \text{ ng}/\text{m}\ell$ であった。

TBGにも年齢別の差は認められなかった。平均 $2.216 \pm 4.51 (\mu\text{g}/\text{m}\ell)$ 。

結論：20才台から50才台迄の成人男子でみるかぎり、甲状腺ホルモン測定値は T_3 を除き殆んど全く変らない。

122 高令患者における甲状腺ホルモン
東京都養育院付属病院 核放部
稲葉妙子、黒田彰、矢田部タミ、星賢二
山田英夫、飯尾正宏

甲状腺関係ホルモンは、甲状腺疾患や下垂体疾患のほか、肝疾患、腎疾患、慢性耗性疾患、妊娠あるいは急性ストレスなどによっても変化することが知られている。また加齢によっても変化が認められ、殊にトリヨードサイロニンは高令になると低下する。また各々のホルモンあるいは検査値はある程度の関連をもって変化する。しかし、高令者では複数の疾患を有することが多く、また免疫異常に伴って抗甲状腺抗体の出現率も増してくるので、これらホルモンの高令者における正常値を求めることは難かしい。

今回は、高令者あるいは甲状腺疾患を除く高令患者において測定したサイロキシン、トリヨードサイロニン、 $T-3 \text{ RSU}$ 、 TSH およびTBGの関係について検討した。今回新たに測定したTBGはRIAgnost TBGを用いRIA法にて測定した。その再現性は、within assayで5.9~6.2%、Between assayでも7~8%と良く、回収試験、稀釈試験とも良好であった。

血中トリヨードサイロニンは高令者になるに従って正常下限~低値を示す頻度が増加する。また血中サイロキシンも同様にやや低値を示すものの頻度が増加する。一方TBGは成35例平均 $2.03 \pm 3.73 \mu\text{g}/\text{m}\ell$ であった。TBGは60才代ではやや増加傾向、70才80才代では逆にほぼ正常であった。しかし、高令者の中には $T-4$ 、 $T-3$ ともに低下し、 $T-3 \text{ RSU}$ の上昇を示すものがあり、 TSH は甲状腺機能低下症の程度には上昇しない症例が認められた。これらの中には、TBGの低下を示すものが見られた。しかし、高令者の中にもTBGの増加症と考えられる症例も見られた。なお、これらの異常検査所見を呈した症例の基礎疾患についても検討をする。